

Asian Ethnology の移行について

B・ドーマン

Benjamin DORMAN

2017年4月より再び、*Asian Ethnology* の刊行元が南山大学人類学研究所となりますことをご報告させていただきます。それに伴い、私も第一種研究所員として南山宗教文化研究所より南山大学人類学研究所へ移籍し、ジャーナル編集を継続いたします。

2006年7月、Peter Knecht氏が南山大学人類学研究所及び*Asian Folklore Studies* 編集長の職を退職されました。当時の研究所には、英語言語でのジャーナルを引継ぎ、編集並びに管理を遂行できる人間はいませんでした。このような状況の中、「南山大学人類学研究所においてジャーナルの管轄が遂行可能となった時点で、再度同研究所へ返還されるものとする」という条件の下、南山宗教文化研究所がジャーナルを引き継ぐかたちとなり、その決定は以降のジャーナル発展を実現する大いなる決断となったのです。

2007年から、私は*Asian Folklore Studies* と *Japanese Journal for Religious Studies* の編集員という補佐的立場を継続する一方で、*Asian Folklore Studies* の編集長となりました。そして翌年には、南山宗教文化研究所職員のサポートを得て、ジャーナル編集の総責任者として南山大学第一種研究所員に就任しました。同時に、アイオワ大学人類学教授であり *Asian Folklore Studies* を長きに渡り支えて下さっていた Scott Schnell 氏に対し、ジャーナルの共同編集者として参加いただく

よう依頼をしたのです。

2008年に共同編集というかたちでスタートさせるに当たり、Scott Schnell氏と私は2つの目標を立てました。1つ目は、論文の著者が事前に特定されるのこのない完全な査読を行ったジャーナルにすること。2つ目は、ジャーナルの名称を *Asian Folklore Studies* から *Asian Ethnology* に変更するということでした。名称変更に至るには我々の思いがありました。“folklore”という言葉に関して、とりわけ欧米でさまざまな政治的課題や学術的議論があることは当然承知していましたが、それが名称変更の根本的な要因となったわけではありませんでした。むしろ、ジャーナルがそれまで扱ってきた内容—つまり人類学・アジア研究・そして“folklore”の交点上にあるもの—をより具体的に表現する名称が必要であると感じていたのです。物語/説話文学・演技/演奏といった文化的表現及び描写としての“folklore”が、それ以降もジャーナルが扱う内容の主たる位置を占めることになるという確信を持っていました。そして今、その当時の確信は間違っていなかったと感じています。

共同編集の形態のみならず、国際的な編集委員会も編成しました。編集委員の顔ぶれはこの何年かで変わっていますが、彼ら/彼女らが残した功績は計り知れません。*Japanese Journal of Religious Studies* と同じく、テーマに沿った特集論文を掲載する形態をとりました。投稿論文の質・量ともに、年を重ねる毎に目覚しく増加しました。Scott Schnell氏は2011年に共同編集者の職を辞し

ましたが、現在もジャーナル製作に積極的に参加してくださっています。Schnell氏の後任である、Frank J. Korom ボストン大学教授もまた、*Asian Folklore Studies* 発行へのご尽力と *Asian Ethnology* 編集員としてのご活躍でジャーナルの長い歴史に携わって頂いています。

南山宗教文化研究所職員からのアドバイスは *Asian Ethnology* を発展反映していく上で、貴重なものでありました。同研究所全職員の理解・励まし・サポートに対し感謝の意を述べさせていただきます。とりわけ、前第一種研究所員であります James Heisig 氏には *Asian Ethnology* の新しいテンプレートの初期デザインと作成に協力いただきました。Paul Swanson 氏には、ジャーナルを維持・管理していくうえでの的確且つ洗練された助言をいただきました。*Asian Ethnology* の準編集長である David White 氏には、ジャーナル製作の技術面で多岐に渡り尽力いただき、新たに書籍並びに映画書評部分をジャーナルに盛り込み、ジャーナルの確固としたパートを作り上げてくれました。White

氏が学術業界と出版業界の強い結びつきを築いたことで、世界レベルでのジャーナルの存在感を増した功績は計り知れません。今後また White 氏と仕事が出来る機会を切望するとともに、南山宗教文化研究所職員とも協力して質の高い学術誌を出版していく所存です。

Asian Ethnology 編集チームは、これまで同様厳しい査読段階を設けて、革新的で興味を抱かれる論文並びに書籍/映画書評を皆様に提供していきます。著者へのインタビューや補足説明・問合せ、会議レポートなど、ジャーナルで扱う内容を更に深く理解する上で役立つマテリアルを取り入れるといった今までに無い新しい手段で、ジャーナルのビジョンを拡大していきたいと願っています。

最後に、編集チームを代表して皆様に感謝申し上げますとともに、今後も変わらぬご協力・ご愛読のほど、心よりお願い申し上げます。

Benjamin Dorman
南山大学人類学研究所